

『伊澤蘭軒』の本文生成過程考

——東京大学総合図書館
天理大学天理図書館所蔵資料からの復元の試み——

山崎 一 穎

要 旨

『鷗外史伝の特異性は、読者が参加をすることである。書き手である鷗外の手元に読者から寄せられる情報、書き手が読み手へ情報の提供を呼び掛けるという双方向性が機能して、書き手と読み手との間にネットワークが成立し、伝記文学が誕生する。

このようなネットワークを解明する資料で今日残されているのは、天理大学の天理図書館所蔵の『伊澤蘭軒』森鷗外自筆増訂稿本」と、その補訂の論拠となった資料の一部が、東京大学総合図書館所蔵の鷗外の手沢資料集に収録されている。

本稿では従来等閑に付されてきたこの両資料の関連を検討する。このことは初出稿と定稿との異同を探るだけでなく、鷗外が補訂した根拠資料を顕現化することになる。

さらに情報ネットワークの実態を解明することは、『伊澤蘭軒』の本文の生成過程を明らかにすることになる。そのみならず、『伊澤蘭軒』に於ける資料の扱い方から、鷗外史伝の方法を解明することにもなる。本稿は補訂稿とその根拠資料を通して、本文の生成過程の一端を復元する。

(序)

鷗外史伝の特異性は、読者が参加をすることである。例えば『伊澤蘭軒』(その三十三)の「▲正誤」欄で、「其二十八門田氏の傍訓はへもんでんうぢなる由木崎好尚君の教によつて正す」と記す。ここに書き手と読み手との間に、コミュニケーションが成立する。そして書き手である鷗外の手元に読者から寄せられる情報、書き手が読み手へ情報の提供を呼び掛けるという双方向性が機能して、書き手と読み手との間にネットワークが成立する。

このようなネットワークを解明する資料で今日残されているのは、天理大学の天理図書館所蔵の『伊澤蘭軒』森鷗外自筆増訂稿本である。さらに天理図書館の「自筆増訂稿本」の補訂の論拠となった資料の一部が、東京大学総合図書館の鷗外文庫の手沢資料集に収録されている。

『伊澤蘭軒』の初出稿(『東京日日新聞』大正5年6月25日〜6年9月5日、「大阪毎日新聞」大正5年6月25日〜6年9月4日)と定稿(天理図書館所蔵の「自筆増訂稿本」との校異の概略については、すでに山崎國紀氏によって明らかにされている。^(注))

しかし、天理図書館の「自筆増訂稿本」と、その補訂の根拠資料を所蔵する東京大学総合図書館(鷗外文庫)の鷗外手沢資料との関係については、従来等閑に付されてきた。わずかに私が短い文章を発表した以外^(注)にない。このことは初出稿と補訂稿との異同を探るだけでなく、鷗外が補訂した根拠資料を顕現化することになる。

さらに情報ネットワークの実態を解明することは、『伊澤蘭軒』の本文の生成過程を明らかにすることになる。そのみならず、『伊澤蘭軒』に於ける資料の扱い方から、鷗外史伝の方法を解明することにもなる。本稿では補訂稿とその根拠資料を通して、本文生成過程の一端を復元する。

(1)

史伝『伊澤蘭軒』は伊澤蘭軒、頼山陽、菅茶山を主軸に親交を持った人々を交又させる。鷗外はこれらの人々の経歴や人となりを自ら調べ、調査の及ばない所は知人に依頼する。

文政三年の夏、蘭軒詩中に福山に還る人を送る詩がある。詩引に「鈴木先生圭輔福山に還るを送る」／「馬屋原伯孝將に福山へ還らんとす、因て一絶を示す」とある。当然のことながら鷗外は鈴木圭輔と馬屋原伯孝はいかなる人かを調べる。「菅茶山の集には鈴木圭輔と書してある。渡辺修次郎さんの阿部正弘事蹟には(正精の時、村上清次郎、菅太仲、鈴木圭輔、北條讓四郎(中略)皆藩の儒員たり」と記してある。只それだけである。「馬屋原伯孝の何人なるかは、わたくしは毫も知らぬ」(その百八)と記している。

鷗外は大正五年九月二十四日付で濱野知三郎(書誌学者、号は穆軒、福山藩の漢学者浜野箕山の子)宛に書簡を送付する。

拝啓太田孟昌(関スル御考証並ニ茶山江戸往反ノ件御教示被下忝奉存候トカクワカラヌ事ダラケテ困却仕居候ニ付恐入候へ共御心付ノ都

合時々御垂示被下候ハ、幸甚 九月二十四日 森林太郎 濱野知三郎様

馬屋原伯孝 福山医

鈴木圭輔 福山儒

森島敦卿樸忠 福山

右イズレモ近日出ツベキ名ニテ小生ノ毫モ知ラザル人物ニ付若シ少シ

ニテモ経歴御承知ハ、御示奉願候 森又白

この手紙を受け取った濱野知三郎は一週間ほどで調査し、鷗外の許に資料を送付する。鷗外は十月一日付で濱野知三郎宛に礼状を送る。

拝啓鈴木馬屋原森嶋三家ノ詳細ナル調査正ニ入手難有奉存候実ニ容易

ナラザル御手数数ト奉存候○蘭軒ト馬屋原氏トノ関係ハ馬屋原成美

(字伯孝)ガ蘭軒門人タリシモノナル事御蔭ニテ判明仕候即三代玄益

ニ有之候○森嶋ノ和歌ハ宜シキ様奉存候御礼迄草々 一日 森林太

郎 濱野学兄

濱野知三郎の調査資料は、今日鷗外文庫中の鷗外手沢資料集「菅頼系

諸家事蹟 単」に収録されている。

鈴木圭輔のことは「その百八」(十月十六日掲載)に、馬屋原伯孝は

「その百九」(十月十七日掲載)に記されている。また、森嶋敦卿は

「その百六十八」(十二月十九日掲載)に叙述されている。確かな資料

に基づいて記述した初出稿は補訂の必要はなかった。

濱野知三郎が鷗外に提供した資料を記す。

鈴木圭輔

諱ハ圭、字ハ君璧、宜山ト号ス 弘道館教授(弘道館ハ福山ノ藩

校)タリ、菅茶山ト交厚シ、天保五年九月廿六日没、年六十三、墓

ハ福山市東町洞林寺アリ碑文ハ篠崎小竹ノ撰、

宜山ノ子ハ乗之介ト称ス、字ハ師揚、篁翁ト号ス 明治十七年一

月十二日没ス、小竹ノ門人ナリ、(傍線山崎。以下同じ)

初代 鈴木順節始郷 始元資

妻鈴木三桂嫡女 河中清左衛門常慎姉

正右様

宝曆九卯三月廿六日 二十人扶持本科被召出

同十辰十二月十三日 出京

翌十一巳三月五日 在京

同年十一月四日

願之通京都引越

明和元申七月廿日

福山引越

安永二巳二月廿八日

奥御医師

同四未二月廿八日

五人扶持御増以上二十五人扶持

天明五巳二月三日

新知百三十石御直

寛政二戌十一月廿一日 願之通隠居

二代 鈴木圭輔 圭 始圭雲 徳輔

妻大橋郡兵衛英賢嫡女

天明八申十二月十八日 儒医之場江被召出二人扶持

同月廿三日 弘道館學術世話取^并御屋形御講釈

寛政二戌十一月廿一日 百石被下置表御医師本科

同七卯八月廿三日 眼科兼

同十年五月廿七日 儒医

享和二戌十一月十五日 上下格御儒者

* (上欄外注) 茶山 寛政四、八月廿六日五人扶持 享和元酉七月廿

六日御儒者格弘道館出席大目付触流同様無足之格令

文化六巳三月十四日 奥詰

同年四月六日 府志御用相勤候^二付御紋付御上下拝領

* (上欄外注) 茶山 福山志御用掛相勤^二付肩衣着用御免

同九申七月廿三日 御宮御造宮^二付御用掛

* (上欄外注) 阿部神社(今ハ縣社トナレリ) 茶山同様

同十四二月十五日 御使番格

同年十月朔日 御宮御用掛相勤^二付金二百疋

* (上欄外注) 茶山同様

同日 御酒御吸物

文政二卯四月十七日 江戸在番

同年五月廿八日 於江戸月並御表之講釈^并丸山学問所出席之儀御儒者申

合勤候様

同年六月四日 別段御奥講釈相勤候様

同年十二月廿三日 毎月講釈相勤^二付御紋付麻御上下拝領

同三辰六月三日 大御目付被仰付奥詰^并御家中学問世話取是迫之通依テ

御家中出會勝手次第月並講釈^并月番当用御免

同日 在番御免

同十七日 帰郷之御目見御紋付御帷子同御着衣地御袴地拝領

同年九月十一日 郡役所吟味立會其外大目付諸虎口等指支候節者申合相

勤候様

同七申二月十九日 御箱掛月番当用諸虎口相勤候様

同年十一月十七日 御儒者

同日 御勝手詰御礼事之節者御勝手役同様出仕御礼可申上旨

同十亥五月九日 奥詰

天保二卯正月廿九日 江戸在番

同年四月十九日 月次御表之講義^并丸山学問所出席講釈其外諸士取立御

儒者申合候様

同年十二月廿三日 平日出精相勤^二付御紋附麻御上一具^并毎月講釈大儀

思召金三百疋

同三辰五月九日 帰郷之御目見御着衣地御紋付御帷子拝領

同五年九月廿六日 病死

* (上欄外注) 碑文小竹撰

三代 卓介 秉 後秉之助

妻今村五兵衛勝寛三女 後妻江阪弥蔵康成嫡女

鷗外は濱野知三郎の資料中、私が引いた傍線部のみを用いて、初出稿を掲出する。その書き出しは「わたくしは濱野知三郎さんを煩はして検

してもらった。／鈴木圭、字は君璧、宜山と号した。」と、名、字、号

を記し、次に官歴を述べ、茶山との関係に及び、没年、後継者に及んで
いる。鷗外の、資料を簡潔に要約する力に驚嘆する。しかし、すべてが
上述のごとくは行かない。以下の章では初出稿に対し、読者から訂正の
資料が寄せられ、補訂稿を作ることになる状況を取り上げる。

(2)

鷗外は『伊澤蘭軒』その五十二(「東京日日新聞」「大阪毎日新聞」大
正五年八月二十日掲載)に於いて、文化四年二月十五日蘭軒は長崎の明
倫堂の積尊の儀式に参列したことを記した。そしてその祭酒向井元仲に
ついて次のように記述した。

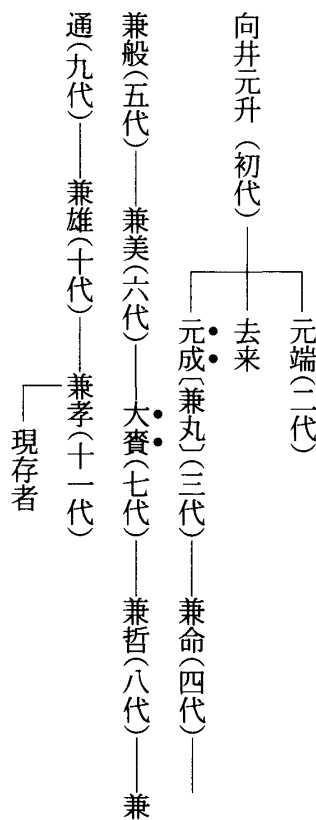
向井元仲の下に「名富、字大賚」と註し、又第八の下に「今年有
堂宇重修之举、故之」と註してある。

向井元仲は恐らくは靈蘭の裔であらう。靈蘭元升は肥前神崎郡酒
村の人向井兼義の子であつた。兼義は晩年に長崎に住んでゐた。靈
蘭は雑髪して医を業としてゐたが、万治元年に京都に徙り、伊勢の
大廟に詣でて髪を束ねた。靈蘭に一女三子があつた。女千子は俳諧
を善くした。長子靈軒元端は医を以て朝に仕へ、次子魯町元成は儒
となり、季子元淵は俳人落柿舎去来となつた。元成は延宝七年に長
崎に還り、陸沉軒南部草寿の後を襲いで、立山の学職に補せられた。
元仲は此元成の後であらう。

この記述を読んだ鈴木券太郎は、鷗外に書簡を寄せる。

残炎難堪候処益々御清寧奉上賀候 東京日々及大阪毎日に御掲被
成候伊澤蘭軒晨夕拝読感歎罷在候 その五十二中、向井元仲は恐く
は靈蘭の裔であらう。又、元仲は此元成の後であらう。と御記述相
成候件武藤長衛氏が京都細川書店発行「ほんや」三月号(第二巻第
二号)に、向井家畧系図と題する一文を寄せ居られ候処、これに
拠れば、

向井氏畧系



と有之候、武藤氏之調査は信頼すべきものと存候 乃ち元仲即大賚
に候、感漬之余り不顧失礼敢て裁一書御参覈之一端、供し候 敬具

醇庵生拜

鷗外先生 侍曹

五年八月廿一日

「雑記丙辰
人名類 一」所収

鷗外は鈴木券太郎醇庵の報を得て、「その五十二」の記述を「その五
十六」(八月二十四日付)で訂正する。

▲正誤 ○其五十二「恐くは靈蘭の裔であらう」を「靈蘭の裔である」と改む○「元仲は此元成の後であらう」を「元成より兼命、兼般、兼美を経て元仲に至り、元仲の後兼哲、兼通、兼雄を経て今の向井兼孝さんに至つたのださうである」と改む右鈴木醇庵君の教に従ひて正す

八月二十四日掲載の訂正文を読んだ向井家ゆかりの鈴木好太郎が、鷗外に詳細な情報を提供する。

拝啓 御高説伊澤蘭軒未聞の件多く日々有難く拝見いたしをり候
その内小子関係の件にて気付候くだり別紙に認め御坐右に呈し候
御参考にもならは幸甚に候

最も別紙に認め候件にて詳細は山路愛山氏の主筆なりし国民
雑誌所載の拙文「本朝最古の聖廟」(四十五年三月十五日三
巻八号 五月一日三巻九号)中に記しをき候 并せて御参考
迄に

大正五年八月廿八日

鈴木南陵拜

森 林太郎先生様

〈別紙〉

伊澤蘭軒 その五十二

○元升は肥前神崎郡酒村の人向井兼義の子であつた云々 元升は兼義の孫にして、兼義の二男由右衛門兼秀の二男である

○靈欄は一女三子かあつた云々 元升の子は五男四女であつて第一は益寿院元端、仁焉子と称し父の業を継ぎ京都に住し、医を以て家をなす。次は女子、名は春、早世で、次は平二郎兼時、義焉子元淵といひ即ち去来翁である。次は女子名は佐世、宇野氏に嫁す。次は小源太兼丸即ち字を元成といひ礼焉子と称す。次は七郎左衛門利文、久米氏の養子となる、智焉子と称す。次は女子名は千代、清水氏に嫁す。次は城右衛門兼之、信焉子と称し順節と号す。次は女子名を八重といふ。

御高説中の一女三子と有之候は如何にか、次子と季子との順序も異なり又俳諧をよくすと云ふ女、千は系図にこれなき様見受け候。系統に付ては小子「最古の聖廟」認め候際、向井兼孝の次弟即小子愚姪の夫に有之候為め向井家系譜借用参考にいたし候。之に依つて先哲叢談その他二三書の誤りを正し候次第に有之候。

その五十六 付記正誤文中

鈴木醇庵君の御訂正の分に

元成より兼命兼般兼美を経て元仲に至り、元仲の後兼哲云々 元来向井氏は代々字に元の字を用ゐ、諱に兼の字を用ゐる来候次第の様見受け候 即系譜によれば元成兼丸、元欽兼命、元仲兼般、良翰兼美と云ふ順序にして醇庵氏訂正の兼般と元仲は全一人に有之候のみならず兼美は元仲の長男に有之候

鷗外は鈴木好太郎南陵の報を得て、初出稿を改め、次のように補訂する。補訂稿を【】で示す。なお——線部は削除を示す。以下同じ。

△補訂稿▽

向井元仲は恐くは靈蘭の裔であらう。【る。】靈蘭元升は肥前神崎郡酒村の人向井兼義の子であつた。兼義は晩年に長崎に住んでゐた。【孫であつた。兼義の次男が由右衛門兼秀で、兼秀の次男が靈蘭であつた。】靈蘭は薙髪して医を業としてゐたが、万治元年に京都に徙【徙】り、伊勢の木廟【大神宮】に詣でて髪を束ねた。靈蘭に十女王子があつた。女王子は俳諧を善くした。長子雲軒元端は医を以て朝に仕へ、次子魯町元成は儒となり、季子元淵は俳人落柿舎去来となつた。【五子四女があつた。長子仁焉子元端は一に雲軒と号し、医を以て朝に仕へ、益寿院と称した。長女春は早世した。二子義焉子元淵、名は兼時、小字は平二郎、後俳人落柿舎去来となつた。二女佐世は宇野氏に嫁した。三子礼焉子元成は一に魯町と号して儒となつた。通称は小源太であつた。四子智焉子利文、通称は七郎左衛門、出でて久米氏を嗣いだ。三女千代は清水氏に嫁した。田能村竹田の記に靈蘭の女千子が俳諧を善くしたと云ふのは此人か。五子信焉子兼之は通称城右衛門であつた。四女は八重と云つた。】元成は延宝七年に長崎に還り、陸沉軒南部草寿の後を襲いで、立山の学職に補せられた。元仲は此元成の後であらう。【元成より兼命元欽を経て兼般元仲に至り、元仲の後兼美、兼哲、兼通、兼雄を経て

今の向井兼孝さんに至つたのださうである。】

鷗外はこの補訂稿を「その六十四」(九月一日掲載)の「▲正誤」欄で記し、その末尾に「以上鈴木南陵君の教に従ひて正す」と明示している。

(3)

鷗外は『伊澤蘭軒』その七十四(「東京日日新聞」「大阪毎日新聞」大正五年九月十一日掲載)に於いて、文化十二年二月六日伊澤蘭軒宅に招かれた客を紹介する。すなわち菅茶山、大田南畝、久保筑水、狩谷極斎、石田梧堂、河原林春塘らである。そして鷗外は次のように記述する。

新に出た人物は筑水と春塘とである。久保愛、字は君節、筑水と号した。通称は莊左衛門であつた。信濃の人だとも、安芸の人だとも云ふ。孰か是なるを知らない。(中略)序に云ふ。大日本名辞書の此人の條に統諸家人物誌が引いてあるが、青柳東里の統諸家人物誌には載せてない。河原林春塘は未だ考へない。

この日(九月十一日)の朝刊を読んだ井上哲次郎は、すぐ鷗外宛に書簡を寄せる。

拜啓本日伊澤蘭軒その七十四に久保筑水のことを論じて「青柳東里の統諸家人物誌には載せてない」と有之候得共、五十二葉表村ト総の次に記載有之候、但し目次には脱逸致候、又「信濃の人だと

も、安芸の人だとも云ふ」と有之候様に筑水の郷国に就いては二説有之候得共、彼自身は荀子増注の序にも標注淮南子の序にも「信州久保愛」と明記致候故、信濃人なるべきかと奉存候、芸備偉人伝に広島の人と致候は聊疑敷相覚申候、匆々不宜、

大正五年九月十一日

井上哲次郎

森林太郎殿

「雑記」己未人名類 二 所収

鷗外は井上哲次郎の指摘を受けて、「その七十四」を補訂する。

△補訂稿▽

新に出た人物は筑水と春塘とである。久保愛、字は君節、筑水と号した。通称は莊左衛門であつた。信濃の人だとも、安芸の人だとも云ふ。孰か是なるを知らない。【荀子増注の序、標注淮南子の序等の自署に拠るに、信濃の人で、一説に安芸の人だとするは疑はしい。】(中略)序に云ふ。木田本人名辞書の此人の條に統諸家人物誌が引いてあるが、青柳東里の統諸家人物誌には載せてない。【村ト総の次に此人を載せてゐながら、目次に脱逸してゐる。】河原林春塘は未だ考へない。

鷗外はこの補訂稿に基づいて、初出の「その七十七」(九月十四日掲載)の末尾で訂正する。そして「右二條井上巽軒君の教に従ひて匡す」

と明示している。

(4)

同じく「その七十四」に於いて、茶山が文化十二年二月江戸を發つて神辺へ帰郷した折の記述は、初出稿では次のようになってゐる。

茶山の此旅には少くも同行者の紀行があつた筈である。一行の中には豊後の甲原玄寿があり、讃岐の臼杵直卿があつた外に、又伊勢の河崎良佐があつた。所謂「驥蚤日記」きぼうを著した人である。

鷗外は初出の人物に対しては、今まで号、父名等の情報を提示してきていた。しかし、先の引用文中の「甲原玄寿」「臼杵直卿」については触れていない。この段を読んだ近藤俊吉は鷗外に情報を提供する。

甲原玄寿之畧歴

玄寿諱ハ義、漁莊閑人ト号ス豊後国旧ト杵築藩ノ吉広村ニ生マル(今ハ大分県東国東郡中武蔵村トナル)実ニ寛政四年一月四日也父ヲ玄易ト云ヒ家世ニ医ヲ業トス幼時隣村富永村三浦黄鶴(三浦梅園ノ長子)ニ就テ学ブ

文化七年(月日不明)負笈郷ヲ出デ築前国龜井昭陽ノ門ニ入り学フコト三年偶々菅茶山備後ニ在リ関西学海ノ泰斗ナルコトヲ聞キ東上ノ念愈々切ナリ即チ文化九年(月日不明)筑前ヲ辞シテ備後ニ赴キ茶山ニ師事ス茶山喜ヒテ厚ク之ヲ遇ス時ニ玄寿年二十一也翌年衆ニ擢テ、塾頭トナル偶々頼山陽田能村竹田尋テ至リ一時門ニ集マル玄

寿之ヲ優待シ塾頭ヲ二氏ニ譲ルモ二氏互ニ謙讓シテ承ケス茶山之ヲ聞
キテ其謙德ヲ称シ二氏ヲ客分トシテ別ニ優遇シ玄寿ニハ依然塾頭ヲ命
セリト云フ

文化十一年師ヲ奉シテ江戸ニ行キ翌年帰塾ス

文化十三年（月日不明）玄寿我家業ノ医学就業ノ為メ不得已茶山
ノ門ヲ辞ス玄寿茶山ノ塾ニ在ルコト前後五年茶山深ク別ヲ惜ミシト
云フ全年大阪ニ出テ蘭医斎藤方策、中環、鳩野元達等ニ就テ医学ヲ修
メ傍ヲ篠崎小竹ト交際セリ

文政三年玄寿年二十九家郷老親アリ倚閭ノ情切ナリ因テ帰国ス然
レトモ江湖ノ志勃然止マス文政七年親ニ乞フテ再ヒ郷ヲ出テ長崎ニ至
リ西人「シーボルト」氏ニ就キ研究十ヶ月偶々氏ノ帰国ニ際シ玄寿モ
已ムヲ得ス帰国ス爾後郷ヲ出テズ終ニ明治八年三月廿四日易簪セリ
享年八十四

生前旧藩主玄寿ノ学徳ヲ聞キ乘馬帯刀ヲ許サレ物ヲ賜リ屢々且一
日藩主郊外ニ花ヲ賞シ枉駕玄寿ノ盧ヲ訪ハレ詩アリ玄寿之ニ和ス当時
ノ玄寿光荣得意可想也

以上

右近藤俊吾報 大正五年九月二十二日^(注3)

「菅頼系諸家事蹟 単」所収

鷗外は近藤俊吾の齎した甲原玄寿の略歴を得て、初出稿を簡潔に補
訂する。

△補訂稿▽

豊後の甲原玄寿があり、讃岐の臼杵直卿があつた。【玄寿、名は
義、漁荘と号した。杵築吉広村の医玄易の子である。直卿、名は古
愚、通称は唯助、黙庵と号した。後牧氏に更めた。此甲原臼杵二氏
の】外に、又伊勢の河崎良佐があつた。所謂、「驥蚕日記」を著し
た人である。

鷗外はこの補訂を初出の「その九十一」（九月十九日掲載）の末尾の
「▲正誤」欄で、「右玄寿の條は近藤俊吾君の教に従ひて補ふ」と記し
ている。臼杵直卿についての補訂の根拠資料は鷗外文庫中には見出し
得ない。

(5)

その八十四（九月二十一日掲載）で、茶山の詩会に列った太田孟昌に
関して鷗外は「茶山はへ江都太田孟昌」と称してゐる。狩谷極斎の門人
に、太田方、号全齋と云ふものがある。或は同人ではなからうか。」と
記述した。鷗外は太田孟昌と太田方を同一人物と推定したのである。

濱野知三郎が鷗外に資料を寄せる。この資料によって鷗外は推定の誤
りを訂正する。濱野知三郎の資料を次に示す。

太田全齋 子孟昌

太田孟昌ハ阿部伯爵家ニ所蔵ノ太田家由緒書

太田八郎経方ノ條ニ

嫡子 太田昌太郎 周

病人ニ付勤仕無之

太田又太郎 武群 始信助

実次男

文化三寅十一月二日 願之通嫡子

トアリ、又、川目直ノ校註韓詩外伝題言ニ

太田叔龜有活版韓子翊名方号全齋福山藩臣其子孟昌及張恭庭有筆記数編

云々

トアレバ孟昌ハ全齋ノ長男ナリシコト明ナリ

尚、文化十三年ニハ孟昌廿八歳、全齋五十八歳ナリシナリ因ニ全齋ハ文政

十二年六月七十一歳ニテ歿セリ(蘭軒ト同年ニ)之ヲ天保六年六十一歳ニ

テ没シタル掖齋ノ門人トスルハ年齢ノ上ヨリ見テ如何ト思ハル乞高教

第七十四回 茶山ノ江戸ヲ発シタル日ハ菅太中晋帥由緒書ニ

文化十一戌二月廿六日就御用出府 十二亥二月廿四日帰郷ニ付御

紋付麻御上下金五百疋トアリ

(菅太中由緒書ハ福府叢園ヨリ抜録)

太田家ノ墓

芝公園地内永平寺出張所内天光院墓地ニアリ太田家ノ菩提所ハ林松院ト

威徳院トナリシモ後廢寺トナリ現今ハ天光院ニテ之ヲ管理セリ

全齋ノ墓今ハナシ明治十二年十月一日太田直次郎トイフ人先祖ノ合葬ヲ

ナセリ故ニ天光院ニハ左ノ如キモノヲ存スルノミ

表面

先祖代々墓

右側

広島県下備後国福山
士族 太田直次郎建
明治十二年十月一日

「菅頼系諸家事蹟 単」所収

鷗外は濱野知三郎の資料を得て、「その八十四」を補訂する。

△補訂稿▽

狩谷掖齋の門人に、太田方、号全齋と云ふものがある。或は同人
ではなからうか。【孟昌、名は周、通称は昌太郎である。父名は経
方、省いて方とも云ふ。字は叔龜、通称は八郎、全齋と号した。阿
部家に仕へて文政十二年六月七十一歳にして歿した。孟昌は家を弟
武群、通称信助、後又太郎に譲つて分家した。孟昌が事は濱野知三
郎さんが阿部家所蔵の太田家由緒書と川目直ちよくの校註韓詩外伝題言
とに拠つて考証したものである。】

鷗外はこの補訂稿に拠つて「その九十」(九月二十八日掲載)の「▲

正誤」欄に訂正を掲載する。紙幅の関係もあって、自筆増訂稿本の本文
と若干相違している。すなわち、「△孟昌は家を弟武群、通称信助、後
又太郎に譲つて分立した」以上濱野知三郎君の考証に拠りて訂正す」で
止め、濱野知三郎の考証の出典資料を省略した。なお、補訂稿の「分

家」は「分立」となっている。定稿の本文は鷗外自筆の「分家」とすべきであろう。

濱野知三郎の情報は、太田孟昌が太田方の長子であることを齎したのみならず、文化十二年正月九日蘭軒宅を訪れた茶山が、江戸を去った日についての情報をも伝えている。鷗外は「わたくしは只茶山の江戸を去った時の二月なるを知つて、何日なるを知らない」（その七十四）と記した。それを踏まえて、濱野知三郎は「菅太中由緒書」によって、「十二亥二月二十四日帰郷」付御紋付麻御上下金五百疋トアリ」という情報も伝えている。この一文は「二十四日、帰郷」付とも「二十四日帰郷」付、とも読め、読点の打ち方で文意が違ってくる。二十四日に近々帰郷するので、「御紋麻御上下」と「金五百疋」を拝領したとも、「二十四日に帰郷」とも読める。鷗外は茶山と同行する河崎良佐の「驥重日記」を藤井乙男京大教授から借覧（大正五年九月十六日付鷗外から三村清三郎宛書簡）しているが、「驥重日記」の記述からは特定せず「二月某日」のままにしてある。

(6)

鷗外は「その百二」（十月十日掲載）に於いて、菅茶山の書簡（文化四年丁丑八月七日）中に見える「落合敬助とは誰であらう」（鷗外は「その百二」の冒頭で「敬介」と記し、続いて「敬助」と記している。）と興味を持つ。そして「その絢爛の文を以て老茶山」の知遇を得た人は、「凡庸の士ではあるまい。世間若し落合某の何人たるを知る人

があるならば、わたくしは敢て教を乞ひたい」と記す。鷗外の呼び掛けに諸氏から早速情報が寄せられる。まず十三日付三村清三郎（在野の書誌学者、号は竹清）からの書簡を次に示す。

拝復 毎日の雨天御同様困り申候 浜野氏へ御尋被下全齋之事
又々御示被下御懇篤之段深く御礼申上候 目下文展御関係御多忙之
由閑につけは雅事に累せらる御察申上候 落合敬介之事 十日の新
聞に見之申候 定めし博識より之御報にやと存候へ共序故申上候
介は助にて飫肥藩落合双石の事と存候 名賡 字子載 初鉄五郎
後敬助と覚候 印に藤賡之印と候故藤原姓と存候 父名は兼令 少
年の時より詩を作り学を好み大峯 茶山 春水に従ひ又昌平校にも
学ひ永く大阪にも住候と存候 浪花人名録に見えし筈と存尋候処見
当り兼申候 手狭にてあちこちへ書物を入れ置候故取調度時は家搜
し同様にて候 御笑被下度候 後藩之侍読となり明治元年四年は誤と存申候
八十四にて歿候由されは丁丑三十三かと存候 所蔵の幅は 寒夜と
題して

夢醒繩床夜雪明 不業寒粟滿身生

嫣然倍見梅花活 水凍銅瓶磬有声

*（上欄外注） 有声之上の字磬のやうに候 よめかね申候 若は磬にて

候や

と御座候 鴻爪集六卷 これは刊行之由未見候 論語統 左伝統
国語統などの著候由

混外之小箋甚た汚きもの見出し候間封入献呈仕候 まだあつた筈に

て候へ共見当り不申候間甚たきたなく失礼乍ら御笑迄にさし出申候
御笑納被下度候早々

景辰十月十三日雨窓下 三村清三郎

森林太郎様

「雑記」己未人名類 二」所収

同じく十四日付の清水右衛門七の書簡を示す。

拝啓

伊沢蘭軒先生記事中ニ落合敬助氏云々拝読致候ニ付私ノ所持書冊中

ニ左ノ記事在之候

落合廣 字子載 号雙石 称敬助 日向飫肥侯教授 所著有周

易統 論語統 左伝統 国語統 及詩文集七卷 寓梅檀木橋北

* (上欄外注) センタン木橋ハ大坂市ニアリ

私ノ故郷 攝陽灘魚崎村徳川時代ニハ 五百崎ト申候 音読ノ誤ニテ魚崎ト成リ候 ヲカシ 遊歴ニ被

参事有日向藩儒ニ候

* (上欄外注) 為参ノ年曆ハ慥ニ氣憶イタシマセンガ文久一、二年ト存

候

歳八十齡 斯ノ漫遊ノ終焉ト被察候 酒狂家ニ无之甘顛ニ候 筆迹ハ

古人ノ真似スルデ無ク脱俗一家ノ風アリ 筆法ハ筆鋒ヲ丸ク一二度

回シ為書 外ニ類ノナキ筆法ニ候 江戸昌平校ノ遊学者ニ候 旅行ノ

際ハ両掛ト申物ニ書籍ヲ入レ其レハ家僕カ肩ニスルデナク宿所ヨリ次

へく送リ届申候 老体ナ(レ)トモ腰モ不樓 杖モナク 長刀ヲ差

シ健足ナリト 先生ノ謂レ候ニハ高齢ナレトモ齒痛肩凝等ハ全以テ

不知ト為申候 先醒ハ圭角無ク温和ナル御仁候 国ニハ男子有リ

大阪ニ御留在之候ト聞候 学派ハ朱子学ノ容存候 八十一歳ニテ大坂

デ男子為改候て依而八十一ト名称被致候よし

書迹ハ大阪市及西ノ宮醸酒家ニハ必ズ有之候 東京ノ柳先生ノ世

俗ニ密ナル学問デハ無ノ候得トモ儒者トシテハ大家ト尊敬致候

右ハ寔ニ俗事而已ニテ失礼ニ候とも私幼年頃家而てノ夜話ニ聞取候次

第ヲ申上ノ耳

十月十四日

森 先生

「雑記」己未人名類 二」所収

清水右衛門七

鷗外はこれらの資料を得て、初出稿を補訂する。

△補訂稿▽

此落合敬助とは誰であらう。当時能くその絢爛の文を以て老茶山

の十顧に遇つたとすると、決して凡庸の士ではあるまい。世間若し

落合某の何人たるを知る人があるならば、わたくしは敢て教を生か

たい。【落合廣、字は子載、初鉄五郎、後敬助と称し、双石と号し

た。日向国飫肥の人である。双石の事は三村清三郎、井上通泰、日

高無外、清水右衛門七の諸家の教に拠つて記す。】

鷗外は多くの情報を得ながらそれを捨て、〈名、字、号、出身地〉の

みを補訂する。それを「その百九」（十月十七日掲載）の末尾で報告する。

(7)

寛政六年秋、茶山らは巨椋の池に遊んだ。鷗外は「その百六十七」（十二月十八日掲載）で、茶山の詩の引に「中秋六如上人、蠣崎公子、伴蒿蹊、橘惠風、大原雲卿、と同一舟を椋湖に泛ぶ」とあるのを踏まえて、「同遊六人」と記した。上田芳一郎は鷗外に情報を寄せる。

貴稿伊澤蘭軒其ノ百六十七寛政甲寅仲秋ノ巨椋湖ノ同遊六人ト御記載アリシハ六人ニアラデ八人の様ニ候 同年ノ同泛舟椋湖三首ノ引ニハ成程六如上人、蠣崎公子、伴蒿蹊、橘惠風、大原雲卿五人ノ名ヲ記シアレトモ此ノ外ニ米谷金城ト松孟執ノ二人アリ 乃チ茶山ト合セテ八人ト相成候 右ハ其ノ後ノ文政元年戌寅ノ茶山ノ詩集ヲ見ルニ伏水道中ノ引ニ寛政甲寅中秋蠣崎公子六如上人伴蒿蹊橘惠風(大)原雲卿米子虎松孟執及余八人泛舟干椋湖ト有之 又題米子虎蔵椋湖賞月図ニモ同遊八人 今僅存波響公子米子虎及余三人トアリ 円山ニ於テ金城ニ邂逅シタル時ニモ八人同侶五人亡ト歎セシニテ知ラレ候

「菅頼系諸家事蹟 単」所収

鷗外は「その百六十七」の文末に補綴をする。

△補訂稿▽

【上記し畢つた後、寛政甲寅の遊には猶二人の同行者があつたことを知り得た。即ち米子虎、松孟執である。事は文政戊寅の詩引及己卯の詩註に見えてゐる。是は上田芳一郎さんの示教に由つて覆検した。】

この補訂稿を鷗外は初出の「その百七十四」（『東京日日』十二月二十五日、「大阪毎日」十二月二十六日掲載）の「▲正誤」欄に「○其百六十七の末に下文を補ふ」と記し、提示した。

(8)

福田禄太郎(霽涯)へ一八六六一一九三二(漢学者、福山誠之館中
学教諭。井伏鱒二は誠之館中学校で「漢文」を教わっている。)が、鷗外に宛てた書簡(大正六年)を示す。

拜啓仕候 本年非常之寒氣ニ御座候処 益御清祥被為入御座候由
萬々奉慶賀候 過般濱野氏帰国之節 忝御伝音御芳情奉謹謝候 又々御
懇願多々思付候俣申出候 杜撰之義 萬々御高恕御願申上候

○百八十号

菅惟繩墓誌。関藤々陰ノ作ノ義ニ付 懇願仕候 藤陰ハ本藩有数ノ
人ニ付 何レカニ御附録下サレ候て伝記御掲載下されましくや
猶 江木鰐水、門田朴斎ハ藤陰へ合せて福山三先生ト称し居候処

幸ニ朴斎丈ハ御発表下され候得共 江木師ニ至りてハ未だ名字ダニ御
掲載無之 小子輩 福山人ノ遺憾に存居候義ニ御座候 可相成ハ
是亦御付記御頼申され間敷や

猶 蜀隴の望として申試候 藩中 和歌師の錚々たるハ 松本長米
良遠ニ御座候 同師ハ貴藩野々口先生ニ学び 福羽先生ニ親善す
良遠墓題字ハ美静先生の御手ニ御座候 右様ニ付 紙幅御割宛 屋鳥
之情ニ入ニ願上候

○百八十三号

椋柏二軒 規諭美談ニ付説シテ 幕府医官就職相讓之義ハ 御掲載
無之哉

○百八十四号

山室士彦、子彦ノ件
別冊の福山風雅集稿本。未開牡丹詩。古詩箋三品 御寸暇之御慰
旁々差出候間 御一覽被下候ハ、満悦不過之、猶 真野幸作氏よ
り先生宛 不日送付可仕筈の筆記ものニ付 山室氏 御一見願上候
(以下省略)

○百八十四号

石坂白卿ハ福山人ニ候ヤ 同上候 藩中ニモ石坂姓有之候由なれど此
人ハ算術家らしく御座候 (以下省略)

○百八十五号

山室の記事中「藤某ハ恐くハ佐藤一斎であらふ」御尤と存候 但
福山藩ニ伊藤重蔵先生ノ原院代ニ弘道館也 誠之館也ニ関係有之候間

是亦試ニ伊藤家ナルモノ云々と申すこと丈申述候 家系別記ノ通
リニ御座候間 是亦一応御劉覽願上候
○百八十七号

「門人の父の答であつた」ハ正宗院の奉仕せし君侯の若君様 至極
お人よしの方の言とも聞き及びし様ニ御座候 無論小子誤聞と存せ
られ候へども 是亦例の杜撰不顧失礼候
猶 正宗院ノ旗本某に嫁したるときの盛況 并ニ一子を置きて旧と
の君に仕へ 一子六十余に至りて 初めて母に初対面せしなどの逸
話も有し様 聞及候 又々誤聞 雑斗候得共 御取調御付記之御紙
幅ハ無之候哉

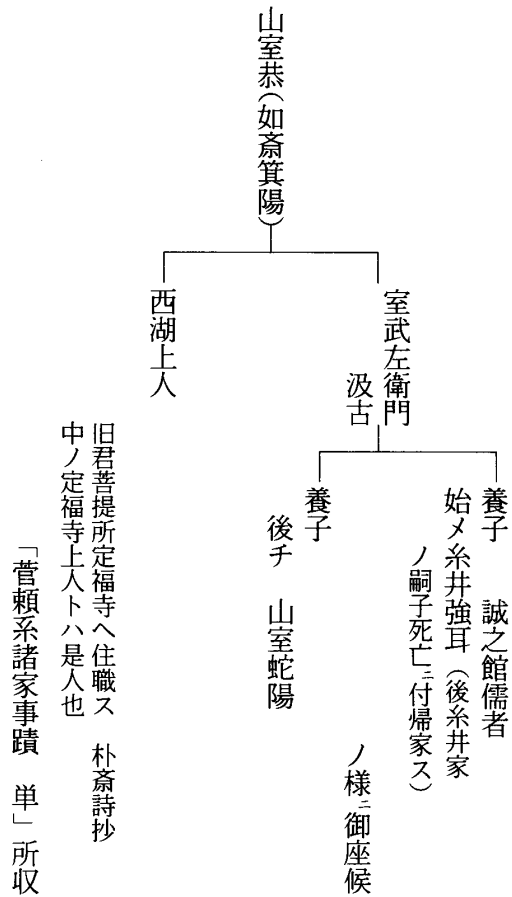
○百九十四号

蘭門五哲の岡西玄亭ノ家ハ後ニ岡ト改姓シ 後代岡俊(ノ父寛斎
(小島流ノ書キ手))(傍注) 太郎と申者 四十余歳 今西片町十番
地内へ住せりとも承及候 自然大様ニ候哉 既ニ遺物などハ取納 大
成候哉 聞書申添候

以上 何れもく御為めにハ成らざる事をのみ申述 御一読にすら
御大切なる時に御迷惑相懸け 萬々恐入候得共 御垂教兼呈禿筆候
御高然萬々祈上候 (以下省略)

森 先生
福田 禄太郎 敬具

函丈



この書簡の年次は不明であるが、「その百九十四」(『東京日日』大正六年一月二十五日、「大阪毎日」一月二十三日掲載)を読んでいるので、大正六年一月二十四日、五日頃と思われる。

福田禄太郎の書簡には、読者から作者への注文が記されており、読者意識を示している興味深い。鷗外もそれに呼応して、二月八日付の福田禄太郎宛書簡では、「江木、関藤ノコトハ実ハ詳細伺候上ニ書キタカリシモノ候ヘドモ時日切迫ノ為メ御覧ノ通ニ相成候尤材料御示被下候ハゞ又跡ニ書キ込候コトモ出来可申存居候」と報じている。

さらに福田書簡の重要性は、山室士彦、子彦についての情報を提示している点である。鷗外は「その八十四」で蘭軒詩中の「山室士彦」と、

茶山集の詩中の「山室子彦」とが「同じだとすると」と、確定を避けている。福田書簡の「山室士彦、子彦ノ件」並びに系図等によって「子彦」が正しいことが判明する。

書簡の「福山風雅集稿本」(江木戩)「未開牡丹詩」(山路伯美輯、白雪楼蔵版)を鷗外は借覧し、筆写している。「未開牡丹詩」の人名中に「汲古山室俊ノ字子彦、称武左衛門、福山藩ノ蛇陽山室修ノ字徳郷、称修介、福山藩」とある。また、「福山風雅集稿本」中の詩人の姓名として「山室恭。如斎。号箕陽」が記されている。鷗外は筆写したこれらの資料を一冊にして、「備後人名録 単」と題簽を付して架蔵している(現在鷗外文庫蔵)。

鷗外は初出稿「その百八十五」で、「蘭軒は士彦の父の病の瘥ゆべきを説いてこれを慰め、その再び江戸に来て業を畢へむことを勧めてゐる」と記し、漢詩を掲げている。それに続けて鷗外は補足する。

▲補訂稿▼

【後に濱野福田両氏に聞けば山室子彦、名は俊、通称は武左衛門、汲古と号した。其父名は恭、箕陽と号した。】

この補訂稿は「その二百三」(『東京日日』大正六年二月三日、「大阪毎日」二月二日掲載)に掲載された。

(9)

榛軒(蘭軒長子)の書中に学殖ある人物として「鈴木宜山、三箇角兵

衛を推す」とある。鷗外は三箇角兵衛についての調査を濱野知三郎に依頼する。濱野知三郎は三箇家の「由緒書」を抜書して、鷗外に投じた。

三箇家

初代 三箇角兵衛頼雄 始孫四郎

享保十八年(丑)六月廿一日 於江戸御出入扶持六人扶持

全年九月廿日 被召出御広間給人新知百石当分大阪表御用尤御用無之節

ハ江戸或ハ御座所ニテ可被召仕之旨

二代 角兵衛時朗 始鹿助

宝暦四年(戊)十二月廿八日 新知百石福山引越御広間御番入

年月略……御密書役……御徒士頭……御供番頭……御使番……町御奉行

……御長柄奉行

安永九年(子)三月七日 自殺

三代 角兵衛知雄 始津之助

安永八年(亥)十月十五日 御供番被召出

文化六年(己)三月廿八日 上下格坂上御番

文政元年(寅)三月十七日 御使番格

全五年(午)七月十七日 印西流弓術世話取

全八年(酉)正月廿九日 右世話取御免

全十一年(子)三月朔日 五十年來勤仕付御紋付御小袖拝領

天保二年(卯)三月朔日 七十歳付金五百匹

全三年(辰)十二月廿六日 病死

四代 孫四郎頼雄 後角兵衛 後重峯

実松村甚五兵衛次男

妻養父林雄嫡女

文政十一年(子)七月廿五日 願之通林雄養子

全十二月(丑)十一月廿九日 嫡孫承祖

天保四年(己)二月廿七日 祖父角兵衛跡式 十人扶持 御広間番

嘉永三年(戊)三月廿九日 印西流世話取同様

「菅頼系諸家事蹟 単」所収

鷗外は「その百九十八」(「東京日日」一月二十九日、「大阪毎日」一月二十八日掲載)於いて、傍線部(山崎)のみを用いて三箇角兵衛を素描する。そして鷗外は「角兵衛に文事があつたことが毫も聞えてゐぬのである」と首を傾^{かし}げている。そんな折再び濱野知三郎が情報を寄せる。

「福山風雅集稿本」

江木 戩

詩人姓名

三箇知雄。字士光。号箕洲。角兵衛

「未開牡丹詩」

白雪楼主人山路伯美輯

序文 江木 戩

鰐水江木戩ノ字晋才、称繁太郎、福山藩

「備後人名録 単」所収

鷗外は三箇家の「由緒書」並びに「福山風雅集稿本」を用いて、初出

では次のように記す。「当時宜山は儒者奥詰、角兵衛は使番格、周迪は奥医師であつた。書中に又「尾道に順迪の墓を酌す」と云ふことがある。順迪とは誰であらうか。」そしてこの文に続けて補足する。

△補訂稿▽

【以上書し畢つた時、濱野氏の報に接した。福田氏所蔵の「福山風雅集稿本」の詩人姓名の部に、「三箇知雄、字子光、号箕洲、俗称角兵衛」と云つてある。此稿本は江木鰐水の手より出でたものだと云ふ。】

鷗外はこの補訂文を「その二百二」（「東京日日」二月二日、「大阪毎日」二月一日に掲載）に呈示する。

(10)

鷗外は漢学者若山勿堂のことを「その二百九十一」（「東京日日」五月二十四日、「大阪毎日」五月二十一日掲載）で記述した。

松田道夫の父は信濃国佐久郡岩村田の城主内藤豊後守正繩の医官で、江戸定府になつてゐた。（中略）それゆゑ道夫は儒たらむことを志して、同藩の佐藤一斎に師事し、旁ら林述斎の講筵に列した。既にして一斎は幕府に召され、高足若山勿堂が藩文学の後を襲いだ。

鷗外は一読者から書簡を受け取る。

拝啓 梅雨の候益御清栄奉賀候 扱拙者は昨年一月頃東条琴台氏

伝記に関し貴意を致し候事有之候 此節御記述の伊澤蘭軒伝面白く
拝見致居候 然る処さる五月廿四日掲載の二百九十一末段に

松田道夫の父は信濃国佐久郡岩村田の城主内藤豊後守正繩の医官
にて（中略）同藩の佐藤一斎に師事し旁ら林述斎の講筵に列し
た 既に一斎は幕府に召され高足若山勿堂か藩の文学の後を襲い
た
と有之候か

林述斎は東濃岩村藩主松平（大給）能登守乘瀧の次男に生れ松平
楽翁公の推挙にて林家を嗣きし人なり 佐藤一斎は全藩臣の子な
り 若山勿堂は全藩の文学なり

岩村は美濃国恵那郡岩村町にして中央線大井駅より南、二里にあり
て軽鉄の便有之候 述斎と一斎との関係を知るには一斎著言志脱録
附録別存中に

公（述斎）之在「巖邑藩」也、齡十七加冠、侯特命「先父」為「帽親」
使「余進」盤盤及柳枝「余時十三、儀訖、公謂」余曰、帽親之子猶
「兄弟」終身不「相離違」也云々

若山勿堂か岩村藩文学たりしは大日本人名辞書に明なり
依て御記述は美濃の岩村と信濃の岩村田とに何等かの相違ある
事と存し候 尤も松田道夫氏は信濃の人なるや美濃の人なるや承知
致さず候 右気付候点御報申迄 御参考に相成候は、幸甚不少に候

敬具

大正六年六月十六日

西尾豊作

森 林太郎殿

侍史

「雑記」未
人名類 二 所収

鷗外は西尾豊作の資料提供を受け、初稿を補綴する。

△補訂稿▽

松田道夫の父は信濃国佐久郡岩村田の城主内藤豊後守正繩【美濃
国恵那郡岩村の城主松平（大給）能登守乘蘊】の医官で、江戸定府
になつてゐた。

鷗外は補訂を「その三百十二」の「▲正誤」欄で「一」の誤右西尾豊作
君の教に従ひて正す」と記している。

(11)

蘭軒の次男柏軒の妻俊が病死したことは、「その三百五」（東京日
日）六月十一日、「大阪毎日」六月十日）に見える。鷗外は「俊の病は
今これを詳にすることが出来ぬが」と記した。次に二通の書簡を示す。

（前略）却説伊澤蘭軒欄本日の栢軒妻清楽院 俗名俊死去の條
病名不詳の由 博士の御記載ニ付御参考迄ニ愚考申上度 尤も伝説の
事故確ト保証は仕兼候へ共崩漏症則チ目下の子宮癌乎と存候 何故
と申候に病中雑談中の和歌に上の句は乍残念失念仕候へ共下の句に
花のしべ石なむる此身は

と申候か有之候 右花のしべ石とは漢名花薬石と申崩漏止血の特効

薬に御座候間右散薬を連日服用仕候事故随分劇しき子宮出血と存候

右清楽院の才媛たるは全く博士の御説の如く種々逸話も有之候へ

共 未ダ婚家せざる娘時代は通称タカと申居候節 一寸勞症状目下

の肺症にて小生の祖父所謂清先人（此字不明）愷の治療を受け居候

節之容体書は必ず自筆にて一回にても真面目な容体書無之其内の一

に例の有名な古歌

逢阪の関の清水に影とめて

今やひくらん望月の駒

と云ふのをもちりたるにて

おゝせつな咳のみ出て影うすく

今や死ぬらん望の子は

望之とは狩谷椽斎之実名に有之 妙齡婦人之作には珍らしき才氣と

今に記臆仕居候

六月十日

清川玄道

堀江宛

拝啓 益々御清榮奉賀候、昨日清川玄道氏より右の如き来状有之候
まま何か御参考になる事も有之も難斗と存じ供貴覽候

草々

丁巳六月十一日

大津市神出

森 鷗外先生

机下

堀江督三

「校勘家事蹟 二」所収

清川玄道の情報は、柏軒の妻「俊」（狩谷極斎の娘）の病気が子宮癌であることを明らかにした。そればかりでなく、俊が「拾遺集」（巻三・秋）収載の紀貫之の〈逢坂の関の〉云々の歌をもちって、へお、せつな咳のみ出て影うすく、今や死ぬらん望之の子は」と詠む才気溢れる姿を伝えている。いつもなら鷗外はこの資料によって速く補訂するが、これだけ興味深い情報をしばらく温存する。

そして「その三百二十七」（「東京日日」七月十八日、「大阪毎日」七月十六日に掲載）から「その三百二十九」（「東京日日」七月二十日、「大阪毎日」七月十九日に掲載）の「柏軒の門人、清川氏」の条の末尾にこのエピソードは見事に活写される。鷗外は満を持して初出稿を掲出する。

わたくしは此に清川氏の家に伝ふる所の一事を附載したい。それは柏軒の妻狩谷氏俊の病の事である。俊は処女たりし時労咳を病んで愷がの治を受けた。当時日毎に容態書を寄せて薬を乞うたが、其文に諧謔の語が多かった。中に、「お、せつな咳のみ出でて影薄く今や死ぬらん望之の子は」の狂歌があつた。「逢坂の関の清水に影見えて今や引くらむ望月の駒」のパロディである。後年致死の病はこ

れとは別で、崩漏症ほうろうしやうであつたらしい。今謂ふ子宮癌であらうか。

其証は当時の歌の四五の句に、「花のしべ石なむる此身は」と云ふのがあつた。漢薬花蕊石くわすいせきは崩漏の薬である。（その三百二十九へ柏軒注の門人、清川氏）

俊に関するエピソードの挿入箇所適切さに構成の妙を見る。また清川玄道の書中の叙述の前後を入れ替えることで、俊の才媛ぶりが浮き彫りにされる。ここに文章の力を見る。

(12)

『伊澤蘭軒』の鷗外の叙述の誤りを正し、補訂し、より正確な本文にするために森潤三郎は「校勘記」を執筆している。さらに富士川英郎は『伊澤蘭軒』標柱ひょうちゆうを発表している。二人の擧あげにならって、一箇所指摘しておく。

大正五年九月二十一日付で鷗外は、三村清三郎に「蘭軒伝ソロソロ極斎西遊ノ年ニ相近ツキ候江戸ヨリ出デ江戸ニカヘルマデノ間ノ月日ナド御見及ニ成候モノ有之候ハバ御報被下度奉願候」と依頼している。翌二十三日の三村宛書簡に「好古小録書入ノ事始テ承知仕候」とある。次に三村清三郎から鷗外宛書簡を示す。

拝復 賈事多忙と申にてハなけれと 兎角書物に疎くなり候て草々御答申上 失礼仕候 (中略) 好古小日録之填注を精査候処 大分詳細に相成候間 左に申上候 又 明治三十五年秋 足利欽

堂氏か新聞日本へ記され候「無聞の学者」〔抽斎 筑水等四十余人〕

椋斎か稲川を尋候逸話見え申候 これも西遊途上之事と推察仕候間

稲川集御検討 若しくハ中村春二さん 御尋いかゝと存候 外

御承知かと存候が 一癖ある学者に候へ共 長井金風さん詳しかる

へき筈と心得候 太田全斎 師承不明ニ存候処 椋斎門人之由 御

記相成定めて確証候事と存 創聞喜申候

○好古日録 永仁古文孝経の条

椋斎日 寛政二年 京師書肆竹筥楼ニテ観

○同 春秋左氏伝

、、、 寛政二年 山田以文ノ家ニテ観ル 押小路外史ノ家蔵也

○好古小録 鴨毛屏風の条

、、、 云 寛政九年三月観

(中略)

○同 法隆寺上宮太子画像

、、、 文政四年六月観

○同 施法隆寺物数書

、、、 文政四年六月廿五日 法隆寺西園院ニテ観

○同 円光大師絵詞

、、、 文政四年七月観

的確なる往還の日時ハ不明にて候へ共 数度之西遊 略相分り候様

存申候 尚 心かけ申度存申候 早々

丙辰九月廿四日 雨

森 鷗外様

「校勘家事蹟 一」所収

三村 清三郎

鷗外は三村清三郎の資料の提供を受け、初稿の「その百二十四」〔東京日日〕大正五年十一月四日、「大阪毎日」十一月五日に掲載を次のように記述する。

わたくしの三村氏を煩はして検してもらった好古小録の填註に、既に引いたものの外、猶左の数箇條がある。

「好古小録法隆寺上宮太子画像。椋斎曰。文政四年六月観。」

「同施法隆寺物数書。椋斎曰。文政四年六月二十五日法隆寺西園院にて観」

「同円光大師絵詞。椋斎曰。文政四年七月観」

最後の一條を見れば、椋斎父子が秋に入つて猶奈良に留まつてゐたことが知られる。

傍線部に注目したい。三村清三郎の資料には「法隆寺物数書」とあった。鷗外あるいは文選工が「法隆寺物数書」と誤った。それは定稿でも訂正されず、現在全集本は「法隆寺物数書」となっている。数書は勅書のことである。本文は「法隆寺物数書」と補訂する必要がある。

おわりに

鷗外に寄せられた情報は、読者層から見ても、質の高いものであった。一部誤った情報があったとしても、資料提供者はそれと知らずに善意から報じたものであった。

しかし、悪戯から鷗外に寄せられた情報を鷗外は「狂人の所為かと疑」(その三百三)い、「朽木氏の存在を疑つて、答書の或は送還せられむことを期してゐた」(同)としながらも、それを「その三百三」に掲出する。福山誠之館中学五年生井伏鱒二の悪戯であった。この事についてはかつて小文を発表している^(注)ので、ここでは触れない。

『伊澤蘭軒』の本文が確定して行く過程は、事前に識者に調査を依頼し、十全に記述された場合「1」を除くと、次のことが言える。(一)の数字は本稿の章と対応する)

- (一) 事前に依頼した調査資料が十分でなく、後に補足する。〔9〕
- (二) 初出稿の誤りを訂正する資料の提供によって補訂する。〔3、5、7、10〕
- (三) 初出稿の誤りを訂正する資料が寄せられ、訂正するが、それが更に誤っており再訂正する。〔2〕
- (四) 初出稿で不明のまま放置してあったことに関して、資料が寄せられる。それによって補綴する。〔4、8、11〕
- (五) 初出稿で不明な人物について、情報呼びかけ、入手した資料によって補筆する。〔6〕

(六) 提供された資料を鷗外、あるいは文選工のいずれが誤ったかわからぬが、そのままになってしまった。〔12〕

鷗外は『伊澤蘭軒』に於いて、「其材料の扱方に於て、素人歴史家たるわたくしは我儘勝手な道を行くことゝとする。路に迷つても好い。若し進退維れ谷まつたら、わたくしはそこに筆を棄てよう。所謂行当ばかりである。これを無能力の態度と謂ふ」(その三)と述べている。これはあくまで鷗外の謙遜の言葉である。

多くの人々から多くの資料が寄せられた。それらの枝葉を落し、幹のみ残す方法を取る。枝葉の方がエピソードを含み興味深いことも多い。しかし、それらは確固たる裏付けが乏しい。それ故鷗外は切り落す。また、柏軒妻後の病死の原因が情報によって判明しても、すぐ補訂せず、エポックな場面に挿入する。これらには鷗外の構成意識が働いている。歴史叙述の客観を求めようとすれば、資料の検索に貪欲になる。執拗

に尋ねる鷗外に関して、三村清三郎は「(大正五年)九月廿五日 森鷗外 市河三陽 両氏より日々照合のてかミあり 少々累しき位なれども多少の益をも受くれは つとめて答也/掖斎西遊之年月を答ふ 好古小録書人にて 年月何々観 とあるによる」(「不秋草堂日曆」と記している。(この「不秋草堂日曆」中の記述は柴田光彦氏の教示に拠る。)

鷗外と識者(読者)との呼応が、近世文化史としての『伊澤蘭軒』を生み出したと言える。

(注)

1 「ビブリア」〈天理図書館報〉第九十八号(平成四年五月、天理大

学出版部)掲載の山崎國紀『へ『伊沢蘭軒』森鷗外自筆増訂稿本』の考察、五八一―九一頁。

上田芳一郎

2 「鷗外歴史文学集 月報7」(二〇〇〇年二月、岩波書店)掲載の山崎一穎『『伊沢蘭軒』における情報ネットワーク』四―七頁。本稿ではこの「月報」の拙稿の一部を吸収している。

3 「右近藤俊吾報 大正五年九月二十二日」は、鷗外の書入れ。

4 筑摩版『森鷗外全集』第五卷(昭和三十五年九月二十八日)所載の「語注」(野々村勝英)によると、「牧氏をついだとあるのは牧野氏が正しい」(五〇〇頁)。

5 上田芳一郎は『伊沢蘭軒』その九十四についても、鷗外に書簡を送っている。次に記す。

香川景樹が漳州の牽牛花の種を得て植ゑつけたのハ昔茶山の書簡(貴稿伊沢蘭軒その九十四)に三十年前とある由なれとも之ハ恐らく誤かと思ひます、景樹の日記にハ享和二年の春四月真野敬勝より此の種子を貰ひ、やまとのとハことにて夕方までも萎ませて花もいとよろしとて「かゝる種あることを知らて朝顔を云々」と詠んだことが記されてあるからこの年初めて植ゑたものと思はれます(といふ譯ハ其の牽牛花の花ハまだ見ぬけれども夕方まで萎まぬ花とハ珍らしとて詠んだ意ハ花とハ云ハで種と云つたので解ると思ひます) 夫から其の種子も茶山から直接に贈られたのでハなくして備中の真野敬勝が京都に来るとき携へ来り之を景樹に贈つたものと見えます、敬勝の上洛したのハ年月詳ならされども景樹とこの事ありし同二年五月五日に古郷に帰つ

たとあり景樹の日記に敬勝の名の見ゆるのハ是から以後であります。

「菅頼系諸家事蹟 単」所収

茶山書簡中の「三十年前」という記述に鷗外は疑問を持ち、景樹の朝顔の歌の作歌年次を佐佐木信綱に調査依頼している。その報告が「その九十六」に引用されている。佐佐木信綱、上田芳一郎の調査によって、茶山の記憶違いであったことが判明する。

このような考証が、鷗外の史伝の叙述には散見する。近世の随筆中に見る考証の系統を引いている。

6 西尾豊作は、すでに東条琴台について情報を寄せている。

東条琴台ニツキ

一、高田市ニ於ケル住所ハ高田市幸橋町^{サイバシ}ニシテ幸橋々際ナリ 旧城址即チ今ノ師団所在地ヨリ言ハハ橋ヲ越エテ左側ニシテ、市街即チ国道ヨリ言ハハ東へ曲リ行クコト四町余橋ヲ越エスニ右側ノ橋詰ナリ 旧高田家中^ニ依レハ其ノ辺ヲ幸橋長屋トイフ 而シ一軒屋ニシテ玄関ハ東ニ向ヒ作ラル城ノ方へ向ヒ居レリ 打見タル処四五間シカナシ

一、文政七年林氏ノ門弟^ニ列シ昌平校ニ読講ス 同十年高田藩主榊原政令ニ聘セララル

政令^{マサノリ}ハ明君ニシテ経論ノ才アリ隱居シテ本所ニ住ス 普通本所様ト称ス

天保三年事ヲ以テ林氏ノ門籍ヲ除カル(原因研究中)

弘化四年榊原家臣属ス

嘉永三年伊豆七島全図ヲ著シ幕府ノ譴責ヲ受ケ藩邸ニ幽セラル

翌年高田ニ謫セラレ幸橋町ニ住ス

一、下田歌子ハ琴台ノ外孫ナリ（ソノ系図未タ考エス）

一、蘭語出来タリトイフ（巷説ニシテ未タ考証スルニ至ラス）

西尾豊作寄
* 鷗外筆

「雑記」己未
人名類 二 所収

なお、西尾豊作には『東條琴台』の著書がある。本書の奥付には

「大正七年二月十五日発行、定価金八拾銭 著作兼発行者 西尾豊

作 / 愛知県愛知郡千種町字吹上三十七番地 発行所 新潟県中頸城郡

田百四十番戸 西尾豊作 発売所 東京堂書店」とあり、「緒言」の文末には

「越後、直江津農商学校に於て／大正六年八月 西尾豊作識」とある。

また、本書には鷗外の題詩と、琴台の嫡孫、下田歌子の題詠の自筆稿
が写真版で掲載されている。次に鷗外の題詩を示す。

遂追原叟著書才 三百師儒受鑒裁

何必摘詞惟大典 我推良史老琴台

丁巳秋日 森 林太郎題

7 「柏軒の門人、清川氏」という章の略目は、その三百十三へ將軍家

茂の上洛（「東京日日」大正六年六月二十日、「大阪毎日」六月十九

日に掲載）から始まる。鷗外の新聞連載を喜ばぬ読者から新聞社へ抗

議が寄せられ、紀州の青年団は連載中止を求めて新聞社へ推し掛ける
事態となった。新聞社側と鷗外との話し合いが持たれる。両者の話し
合いの結果、章のみでなく、そこに叙述の内容を要約した略目を記載
することとなったのではなからうか、と推測する。

8 『井伏鱒二全集』第二巻「月報4」（一九九七年二月、筑摩書房）

掲載の山崎一類『井伏鱒二の森鷗外宛書簡』、一―三頁。

（附記）

本稿執筆に際し、鷗外手沢資料集の閲覧に関しては、東京大学総合
図書館のお世話になりました。また、天理図書館蔵の「森鷗外自筆増
訂稿本」に関しては、岩波書店のご配慮により借覧の機会を得ました。
なお、鷗外宛書簡の翻字にあたっては、元本学教授柴田光彦氏の教示
を得ました。併せてご好意に深謝いたします。

——二〇〇一・一一・一三——